



Title	現代日本語における否定と呼応する副詞の類義表現に関する研究 : コーパスに基づく副詞の意味記述の試み
Author(s)	劉, 時珍
Citation	
Issue Date	2018-10-10
Type	Thesis or Dissertation
Text Version	none
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/29751">http://doi.org/10.15057/29751</a>
Right	

# 学位請求論文審査報告要旨

2018年10月10日

申請者 劉 時珍

論文題目 現代日本語における否定と呼応する副詞の類義表現に関する研究  
—コーパスに基づく副詞の意味記述の試み—

論文審査委員 石黒 圭  
山崎 誠  
森山 卓郎

## 1. 本論文の内容と構成

日本で行われる現代日本語の語彙・文法研究はこれまで、日本語を母語とする研究者の内省に基づく記述的研究が主流であった。しかし、電子化された言語データの整備が近年急速に進み、形態素解析の技術が確立された結果、言語現象を数値化することで量的に分析できる環境が整った。その結果、日本語を母語としない研究者であっても、特定の語や文法形式の振る舞いをめぐる語彙・文法研究が可能な環境が整い、研究は大きく進展したと言える。

しかし、大きな進展が見られた動詞や名詞の研究にくらべ、副詞の研究はそこから取り残された印象がある。対象となる副詞の性格を考究しようとしても、共起・並存する要素は多岐にわたり、単純に数値化することは難しく、前後の文脈を研究者自身の目で一つ一つ確認しなければならないからである。

本論文は、そうした副詞の前後の文脈を筆者自身の目で注意深く確認し、それらを項目別に数え、日本語母語話者の内省に頼らずに個々の副詞の意味と用法の輪郭を明らかに示すことを示した労作である。とくに、数えた結果について項目ごとに、文体的な観点（硬度とくだけ度という軸）、心情的な観点（相手軸と自己軸という軸）、程度的な観点（純粋程度性と評価程度性という軸）という3つの観点に分けて指標化し、副詞の意味・用法を客観的に分析する方法を開発したという点に本論文の独創性が見られる。

本論文は、3部11章からなる。その構成は以下の通りである。

### 目次

第I部 本研究の出発点—日本語学習者のできる解決型（実用的）研究

第1章 問題の所在と研究の目的

1-1 なぜ否定と呼応する12個の副詞を対象にしたのか

1-2 本研究の意義と目的

- 1-3 本研究の位置づけ
- 1-4 本論文の構成
- 第2章 先行研究の検討
  - 2-1 副詞の定義及び分類に関する概観
  - 2-2 本研究における陳述副詞の分類
  - 2-3 否定と呼応する陳述副詞に関する先行研究
  - 2-4 本研究で扱う3組12個の副詞の意味解釈の概観
  - 2-5 本研究の位置づけ及び着眼点
- 第3章 本研究の方法と構成
  - 3-1 本研究の土台
  - 3-2 本研究の方法
- 第Ⅱ部 類義表現の副詞の違い—コーパスに基づく副詞の実態調査からの比較
- 第4章 「ぜんぜん」類の特徴—肯否率・ジャンル・述語・係り先の述語から
  - 4-1 4つの副詞の肯否の割合の違い
  - 4-2 ジャンルの分布の特徴
  - 4-3 係り先の述語から見る「ぜんぜん」類の特徴—2つずつの副詞の比較
  - 4-4 「ぜんぜん」類のまとめ
- 第5章 「あまり」類の特徴—肯否率・ジャンル・述語・係り先の述語から
  - 5-1 4つの副詞の肯否の割合の違い
  - 5-2 ジャンルの分布の特徴
  - 5-3 係り先の述語から見る「あまり」類の特徴—2つずつの副詞の比較
  - 5-4 「あまり」類のまとめ
- 第6章 「なかなか」類の特徴—肯否率・ジャンル・述語・係り先の述語から
  - 6-1 4つの副詞の肯否の割合の違い
  - 6-2 ジャンルの分布の特徴
  - 6-3 述語から見る「なかなか」類の特徴—2つずつの副詞の比較
  - 6-4 「なかなか」類のまとめ
- 第Ⅲ部 副詞の類義表現の違い—データに基づく副詞の二次元軸の交差
- 第7章 副詞の文体を測る—「硬度軸」×「くだけ度軸」の二次元軸の交差
  - 7-1 副詞の文体に関する問題意識
  - 7-2 ジャンル分布からの疑問
  - 7-3 文体を測る文法項目の設定
  - 7-4 8つの文法項目を用い「ぜんぜん」類の文体を測る
  - 7-5 「硬度」軸と「くだけ度」軸を交差させて副詞の文体を論述する
- 第8章 副詞の心情を測る—「自己軸」×「相手軸」
  - 8-1 本章の立脚点

8-2	先行研究
8-3	BCCWJによる2つの副詞の違いの検証
8-4	BCCWJによる2つの副詞の違いの新発展
8-5	結果のまとめ及び考察
8-6	今後の課題
第9章	副詞の程度性—「純粹程度性」×「評価評価性」の二次元軸の交差
9-1	副詞の程度に関する問題提起
9-2	先行研究及び本研究の立場
9-3	肯否形式から見る2つの副詞の程度性
9-4	否定文の形容詞述語から見る2つの副詞の評価性
9-5	特徴文型から見る評価性の検証
9-6	まとめと考察
第10章	副詞の度合いの測定—『分類語彙表』の有効性の検証
10-1	問題意識と研究目的
10-2	困難の度合いが異なる副詞「なかなか」類の測定
10-3	意味的側面
10-4	4つの副詞の困難の役割分担
10-5	まとめと考察
第IV部	本研究の通過点という位置づけと終着点—副詞の全体像（地図）を描くには
第11章	本研究の結論と今後の課題
11-1	12個の副詞の意味付与のキーワードによるまとめ
11-2	今後の課題と研究方向
引用・参考文献	

## 2. 本論文の概要

本論文は、現代日本語における否定と呼応する類義副詞3類12種（「ぜんぜん」類…「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちつとも」、「あまり」類…「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」、「なかなか」類…「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」）それぞれの中核的意味と制約を明らかにするものである。現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）での個々の副詞の出現傾向を、前後の文脈と関連付けながら数値化することで、現代日本語における副詞の新たな意味・用法の分類を提言するとともに、得られた結果から、日本語学習者にとって意味・用法に即したわかりやすいキーワードを提示することによって、副詞の習得に貢献することを目指したものである。

研究方法は、BCCWJを用いて、3類に4つずつ含まれる計12種の類義副詞の意味を明らかにするために、おのおのの副詞の使われている文の文法的特徴に注目して集計してい

る。分析の際、4つの類義副詞の意味・用法の使い分けを明らかにするために「二次元軸の交差論」という斬新な考え方を示し、文体に関する「硬度×くだけ度」、心情に関する「自己軸×相手軸」、程度に関する「純粹程度性×評価程度性」という3つの軸を導入することが有効であることを提案している点に本論文のオリジナリティがある。

本研究は4部からなる。各部の構成は以下の通りである。

第I部は第1章～第3章という3つの章からなり、第1章では本論文の目的と問題の所在、第2章では先行研究、第3章では研究方法について述べられる。

本論文の目的は大きく2つある。1つは3類12種の類義表現の副詞の違いを明らかにし、副詞の類義表現の捉え方、「二次元軸の交差論」という観点を示すことである。もう一つは、内省の利かない日本語非母語話者でも分析可能な研究手法を採り、得られた研究成果をキーワードとして学習者に提示することで、副詞の理解、習得を促進する方法を示すことである。先行研究との違いは、学習者の習得促進を念頭に、BCCWJという量的なデータに基づいて副詞の意味・用法の偏りを帰納する方法論にある。研究方法はBCCWJから得られる大量のデータを項目別に数値化し、各類それぞれに含まれる4つの副詞の違いを探るというものである。

第II部は第4章～第6章という3つの章からなり、3類12種の類義表現の副詞に関するコーパスの実態調査の結果について詳細に説明している。3類に4つずつ含まれる副詞の違いを見出すため、BCCWJから各副詞の用例を1000例ずつ無作為抽出し、それぞれの肯否の割合をまず算出する。次に、本研究の目的に基づき、BCCWJのジャンルの区分を参考にジャンルを6つに分け、各副詞のジャンルごとの出現状況を見る。さらに、副詞の係り先の述語を集計し、2つずつの類義表現の述語の違いを『分類語彙表』の分類をもとに論ずる。これら3つの面から、各副詞の違いを次に示すようにまとめている。

第4章の「ぜんぜん」類の4つの副詞は、「まったく」と「ぜんぜん」は皆無であるという点では似ているが、「まったく」は「ゼロ」に帰する」という異同完全性を表すのに対して、「ぜんぜん」は極限の程度性を持っていることが明らかにされている。すなわち、「まったく」は「ゼロ」の性質のみを持つのに対し、「ぜんぜん」は「ゼロ」の性質と「少」という性質を合わせ持っているという。一方、「すこしも」「ちっとも」は肯否の割合、ジャンルの出現実態、係り先の述語の分類から対になる存在と捉えられ、「ゼロ」ではなく、「少」に焦点を当てるものであると考えられている。

「まったく」と「すこしも」はこの4つの副詞の中で用法が単純な副詞である。「すこしも」は『書籍』で主に用いられ、「ちっとも」よりあらたまっており、外界に対する見方の描写を表している。一方、「ぜんぜん」は中立的で広範囲にわたって使うことができ、また、「まったく」には完全性と強調性という2つの用法があり、これが用例数の多さにつながっているとされる。

第5章の「あまり」類の4つの副詞については、肯否の観点からは、「あまり」「そんなに」「それほど」は割合こそ違うものの肯定形と共起するものが一定数存在するのに対

し、「たいして」は否定形とのみ共起する。共起する述語は非存在の「ない」や形容詞が全般的に多い。ジャンルでは、「あまり」の否定形と「そんなに」の否定形の分布が似ている。「それほど」は肯否とも『書籍（文学以外）』に集中し、『ブログ』と『知恵袋』ではあまり使われていない。「たいして」は『書籍（文学）』に集中し、『書籍（文学以外）』『国会会議録』では有意に少ないことが明らかにされている。

第6章の「なかなか」類の4つの副詞は、肯否からは、「なかなか」は肯否半々を占め、「とても」は否定文が2割弱である一方、「とうてい」は9割以上が否定文である。『分類語彙表』を参考に共起する述語の特徴に注目すると、4つの副詞と共起する述語との一致率が高く、実現の困難という意味で類義表現であることが確認できる。目立った違いとしては、「とても」と「とうてい」はともに「心」に属する上位述語が多く、「予測」「意識」という「思考活動」の述語が多いのに対し、「なかなか」は可能形以外に自動詞も多く、物事の「状態」を表す述語が多いことが特徴とされる。「どうしても」は、述語の意味から、予測段階より「結果」「結論」を述べるような述語が多く、これらはそれぞれ、困難の度合い、物事の進行段階に応じて使い分けられるとされている。

第Ⅲ部は第7章～第10章という4つの章からなり、第Ⅱ部の結果を受け、データに基づく文法項目の数値化を用い、副詞の類義表現の使い分けの基準である「軸」のあり方を検討する。個々の文法項目の定量的分布が意味するところを解釈し、副詞の類義表現について、全体としてどのような考えを軸にすればよりよく副詞の類義表現を区別できるのかを3つの観点、すなわち、文体面の「硬度」と「くだけ度」の交差、心情面の「相手軸」と「自己軸」の交差、程度面の「純粹程度性」と「評価程度性」の交差を論じている。

第7章では、「硬度」と「くだけ度」という二次元軸から副詞の文体的な性格を論じている。「ぜんぜん」類の4つの副詞について、「あらたまり度⇔くだけ度」から見ると、もっとあらたまり度が高い「すこしも」から「まったく」「ぜんぜん」「ちっとも」の順にくだけ度が高くなっている。一方、「硬度⇔軟度」から見ると、「まったく」がもっとも硬度が高く、「ぜんぜん」が中間、「ちっとも」と「すこしも」は軟度が同じくらい高くなっていることが示されている。

第8章では、心情に関する「相手軸」と「自己軸」を分析している。似た用法を持ち、主観的と見なされがちな「ぜんぜん」と「ちっとも」の相違について、一人称とともに使われがちな「ちっちも」は自己軸に沿った話者の主観的な感情が示されるのにたいし、人称とは無関係に使用可能な「ぜんぜん」は自己軸には縛られず、相手の発話への反応など、より相手軸寄りに使われるという結論を導いている。

第9章では、係り先の形容詞の評価性を数値化するなどの手法を通して、副詞が表す「程度」に「純粹程度性」と「評価程度性」という観点を導入し、第5章で似た副詞とされた「そんなに」と「あまり」について、「そんなに」は正負の評価との関わりが薄い「純粹程度性」の副詞であるのにたいし、「あまり」は「負の評価」と「弱程度」が融合

した結果としてよく使われる「評価程度性」副詞であるとし、両者の微妙な違いを、言語コーパスを用いてあぶりだしている。

第10章では、『分類語彙表』を用いて、述語の違いを仔細に検討し、困難を表す4つの副詞「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」の用法の棲み分けを明らかにしている。進行の困難を表す「なかなか」にたいし、「とても」と「とうてい」は事態の実現困難の予測を表している。話者自身の能力判断という自己軸に基づく「とうてい」にたいし、「とても」は自己軸にとらわれない常識に基づく判断を示すとされる。一方、「どうしても」は、結果実現の困難を表しており、進行の困難を表す「なかなか」と対照的である。こうした違いは、『分類語彙表』の意味分類を基準に導けるものであり、意味を数値化するという困難な試みの一つであると言える。

第IV部の第11章では、本研究のまとめと今後の課題が述べられる。第II部と第III部の分析結果に基づいて、本研究で対象とした12個の副詞について、分析の中で用いた意味解釈のキーワードを用いた意味・用法の記述が試みられている。また、論文における厳密な用語規定とは別の、学習者向けのわかりやすい説明の仕方も提案され、最後に、本論文の今後の課題と発展の方向性について示されている。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文は、コーパスから得られる副詞の共起・並存要素を項目として立てて数値化し、副詞の意味・用法の記述を客観的に行う方法を追求したものである。その成果は、次の3点にまとめられる。

第一の成果は、言語コーパスを用いることで、日本語母語話者の内省に頼らずに個々の副詞の意味・用法を明らかにしている点である。日本語母語話者の内省による研究は近年行き詰まりを見せる一方、大学院で研究する日本語非母語話者が増加したこともあり、コーパスを用いた研究は活況を呈している。しかし、そうした研究も形態的指標を取りだして簡便に数えられる研究は一段落しており、新たな研究手法の開発が求められている。そうしたなか、副詞を対象とした本研究は、副詞と共起・並存する要素を数えたり、『分類語彙表』を用いて意味の傾向を見たりするなどの創意工夫によって、これまであまり着目されてこなかった文法的・意味的特徴について数値化の可能性を示しており、前後の文脈を数値化する新たな研究として高い発展性を有すると考えられる。

第二の成果は、日本語教育現場での副詞の説明における貢献が期待できる点である。第一の成果とも関連するが、内省に頼る従来の研究手法では、日本語母語話者の感覚に訴える研究が多く、日本語学習者への説明として適当でない記述のものが多かった。しかし、本論文は、日本語教育のための実用的な研究を目指し、内省に自信のない日本語非母語話者でも可能な客観的記述を志向しており、類義表現の使い分けが明確なエビデンスとともに示されている。そのため、日本語教育の現場でも通用する具体的な記述に結びつきやすい特長がある。

第三の成果は、類義副詞の使い分けのための独創的な基準である「軸」を立てた点である。文体的な観点である「硬度」と「くだけ度」という2つの軸は、話し言葉的・書き言葉的という一元的なものの見方を二次元的に示したという点で興味深い。また、「相手軸」と「自己軸」という心情的な観点や、「純粹程度性」と「評価程度性」という程度的な観点は、渡辺実・仁田義雄らの内省による従来の副詞研究の確かさをコーパスのデータによって裏付けたという点で、実証的な価値を有すると思われる。

一方、こうした成果を収めた本論文にも問題点がいくつか存在する。

第一の問題点は、文法研究としての物足りなさである。もし本論文が文法研究の論文であるとするならば、言えるか言えないかという正誤の問題を突き詰める必要がある。しかし、BCCWJのような既存の母語話者コーパスを用いる場合、言える文について使用の傾向を問題にするしかなく、語彙研究としては十分成立しているものの、正誤を問題にする文法研究としては不満が残る。筆者の母語である中国語母語話者の学習者コーパスなどを併用していれば、さらに興味深い結果が導けた可能性がある。

第二の問題点は、軸として設定されたものの意義づけの問題である。たとえば、「硬度」と「軟度」、「あらたまり度」と「くだけ度」とは厳密には何を意味するのだろうか。文体を検討するうえで、共起する述語の語種（漢語か否か）や文体（丁寧か否か）などに着眼したのは適切であるが、コレスポネンス分析を用いたのであれば寄与率を示し、二次元の軸で説明可能であることを示す必要があることに加え、その二次元の軸がそれぞれ何を意味するのかを慎重に吟味する必要があるだろう。

第三の問題点は、第11章で挙げられているキーワードである。第Ⅱ部と第Ⅲ部の分析結果に基づいたキーワードであり、たしかに平易ではあるが、そうしたキーワードを参考に元の副詞が何かを当てることは難しく、日本語学習者用辞書への応用など、教育的意義を考えた場合、より精緻な記述が求められるだろう。

しかしながら、こうした問題点は本論文の達成した学術的成果を損なうものではない。日本語学習者に説明可能な副詞の意味・用法の記述を目指し、副詞の前後の文脈、とくに共起する述語の特徴に着目して、意味や用法を数値化して客観的な記述にするという斬新な発想は、後に続く同種の研究に大きな影響を与えていくことが期待される。

#### 4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。



## 最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭  
山崎 誠  
森山 卓郎

2018年7月30日、学位請求論文提出者、劉時珍氏の論文「現代日本語における否定と呼応する副詞の類義表現に関する研究—コーパスに基づく副詞の意味記述の試み—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、劉時珍氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、劉時珍氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。